

第Ⅲ部

ラテン・アメリカ都市の発展

7 キト旧市街における権力とエスニシティ

キーワード：植民地起源性、権力、旧市街、キト市

新 木 秀 和*

Power and Ethnicity in the Historic Center of Quito, Ecuador

Key Words: coloniality, power, historic center, Quito

ARAKI Hidekazu

- | | |
|-------------------|-------------------|
| 1. はじめに | 4. 都市空間における権力とエスニ |
| 2. 政治権力と社会民族関係 | ティ |
| 3. キトの都市発展と旧市街の位置 | 5. おわりに |

1. はじめに

スペイン植民地の刻印を帯びつつ、先住民社会から現代にいたる 500 年余の歴史のなかで、一貫して政治の中心であったキト市。アンデス高地都市であるとともに、太平洋とアマゾンをつなぐネットワークの結節点として、またスペイン帝国由来のカトリックの拠点として、その機能を多様化させてきた。この都市の植民地性は旧市街に集約されているが、キト旧市街は同時に、植民地起源都市の歴史と文化の深みをたたえる世界文化遺産でもある。さらにそこは現在、庶民層や先住民層に生活空間を提供しつつ、エスニシティと権力が交渉と衝突をみせる政治の場ともなっている。

本稿の目的は、植民地起源都市であるキト市を対象に、都市空間における権力とエスニシティの関係を概観し、この都市の都市性と民族性を明らかにすることにある。そのため、とくにキト市の旧市街に目を向け、都市の形成と発展の過程において、その位置づけがいかに変遷してきたかという点に注目する。ここで旧市街に注目するのは、植民地起源の都市の場合とはとくに、旧市街という空間に権力性と社会民族性の関係が通時的にも共時的にも凝縮されている、と考えるからである。そこで以下では、

* 神奈川大学外国語学部・専任講師

旧市街を中心にキト市の成立と変遷を概観し、そこにおける植民地および共和国の政治権力の容態、そしてとりわけ支配層と先住民族の関係を軸とする社会民族関係の諸相を検討し、前述の課題に答えたい。かかる作業は、現代エクアドルにおいて先鋭化する先住民運動と政治権力の関係に、都市性という側面から光を当てることにもつながるであろう。

2. 政治権力と社会民族関係

2.1. 植民地性への視点

まず都市、とくに旧市街をめぐる植民地性という概念について整理し、それから植民地性との関連で表面化するエスニシティのあり方を、先住民の場合に注目してまとめておきたい。

植民地起源都市や植民都市といわれる諸都市について都市性を考えるならば、植民地性や植民地起源性という概念の内実を検討することが、不可欠の作業になろう。最近盛んなポストコロニアル研究の議論を都市研究に応用することも、その一環として有効であろう。われわれの関心は、時間と空間という2つの要素に向かう。

植民地性が問題とされるのは、主として通時的な時間の流れにおいてである。しかしそれは、歴史的に議論をさかのぼるという方向だけではない。むしろ、「歴史」（とくに国史 *national history* や正史 *official history*）とみなされるものを、その主体である諸集団、とくに様々な民族集団の視点から再検討・再構成しようという、現在の関心のあり方にかかわる。あくまでも出発点は現在の関心におかれ、そこでは植民地性を軸にする歴史や記憶の政治性が問題にされるのである。代表的なアプローチといえるポストコロニアル研究の視座によれば、植民地経験をもつ地域・国では、かつて旧宗主国から移植された社会制度だけでなく、人びとの思考様式や価値観までもが、植民地時代の呪縛の虜になっていることが多い。独立／脱植民地化にもかかわらず、植民者と被植民者の関係は、支配権力と従属集団（いわゆるサバルタン）との間で、両者のアイデンティティ形成における対抗や抗争となって表面化する傾向がある。こうした状況はラテンアメリカ、とりわけ先住民層の比重が大きい地域や国でも観察される。ここでの関心にそって視野を都市史に広げるとき、そもそも都市が政治や宗教の面で植民地性を内在化してきた存在であることから、ポストコロニアル研究の対象として都市を俎上にのせることは十分可能になってくる。

他方で、植民地性をめぐる共時的な視点として、空間的側面を考えてみても、都市

空間というトポスとの関連から、植民地性を議論することができる。植民地の記憶を秘める都市空間には、もともと政治的・宗教的な権力をめぐる中心と周辺の区分が存在していたし、また住民の居住・生活面でもセグリゲーションという隔離的な力学が働いていた。そのあり方が脱植民地化を経てどのように変化してきたかを考えるには、権力と従属集団（サバルタン）の間における空間的な関係を都市空間の容態にからめて検討する必要がある。その際、権力関係の凝集された旧市街という空間が注目に値する場であることは、後述するとおりである。

2.2. 先住民のエスニシティ

ところで、エスニシティとは何か。また都市空間におけるエスニシティはいかにとらえられるのだろうか。おおまかにまとめるならば、エスニシティとは、異質性や多様性を内包する諸個人・集団について、その個性的な生き方や共同生活の様式（例えば民族性）などの状態をさす概念である。都市はそうした異質性や多様性の存在が当然のごとくみられる空間であって、ここに都市エスニシティへの注目という視座が浮上してくる。加えて、エスニックな諸集団（とくに民族集団）の間には、協調や共存への指向だけでなく、多くの場合、それぞれの独自性を強調することで、反目、対立、軋轢、抗争、さらに流血の惨事にまでいたる要素も内包されている。この意味で、エスニシティの具体的なあり方を都市とのかかわりでとらえることが、ますます重要になっている。

欧米や日本における（社会学や地理学などによる）都市エスニシティ研究の多くは外国人（移住者）集団のそれを研究対象としている（奥田編 1995; 1997 などを参照）。だがキトの場合は、外国人集団間の関係よりはむしろ、先住民族をめぐる歴史・現在の状況の方がより重要であり、議論の対象としてふさわしい。しかも、とりわけ本論のように植民地性を課題にする場合は、都市空間における先住民族のエスニシティが中心的な検討事項となってくる。それゆえ、ここでは先住民族をめぐるエスニシティ（とくに権力との関係における民族性）を議論の対象にしたい。

先住民にとって都市空間は、都市的経験はどのような意味をもつのであろうか。この点については、都市内部の先住民という視点が重要であろう。キトの場合でも、都市空間は従来から先住民と決して無縁な空間ではなく、そこで活動し、または居住する先住民の姿は珍しくなかった。しかも、都市と共同体という二つの場を往来する経験をもつ先住民も少なくなかった。つまり、都市の外国人居住者に関してエスニック・ネットワークの存在がテーマ化されるのと同様に、都市空間における先住民のエ

スニシティを考える際にも、都向移住者である先住民集団と、彼らが生まれ故郷の共同体との間に維持している血縁的・地縁的なネットワークの存在に目を向けるべきなのである。これは人の移動という現実から要請される当然の配慮であろうし、実際、後述するように、先住民運動にとってもそうしたネットワークの存在が有力な武器となっている。

3. キトの都市発展と旧市街の位置

3.1. 建設から都市発展へ

次にキトの都市発展を概観し、旧市街の位置づけについて確認しよう（キト史については Achig 1983; Aguilar et. al. 1992; Lozano Castro 1991; Salvador Lara 1992 などを参照）。

アンデス山脈の赤道直下に位置する現在のキト市だが、実のところ、その起源については議論があり、明確なことは十分わかっていないようだ。18 世紀後半にフアン・デ・ベラスコが書いた『キト王国史』によれば、インカの到来以前の現エクアドル地方には、キト王国という政治国家が成立しており、その中心がキトであったという。ただ、考古学的調査の進展や歴史学界での論争にもかかわらず、キト王国の存在はいまだ確証をもつものとは言えず、むしろ否定的見解が主流のようである。ただ存否とは別の次元で、この伝説的なキト王国とそれをめぐる論議が、エクアドル国家のナショナリズムと絡まりあい、一種の国家神話のごとき作用を果たしてきたことも否定できない。いずれにせよ、先インカ時代の先住民社会において、すでに現在のキト地方が政治の中心地であったことは間違いない。

15 世紀にキトはインカ統治下に入る。広大なインカ帝国の領地の中で、帝都クスコが南部の中心であったとすれば、キトは北部の中心地であった。よく知られるように、キトに生を受けたインカ第 15 代皇帝のアタワルパと、クスコを拠点とするワスカルとの間に、やがて兄弟争いが生まれる。これが帝国の凋落を早める大きな要因になった。やがてスペイン人の侵入を受けて守勢に立ったアタワルパは、部下の武将ルミニャウイやキスキスに命じて、キトに火をかけさせたという。こうして、廃墟となったキトの跡地に、スペイン人が新たな都市を建設することになる。

キトは、スペイン人が南米大陸で最初に建設した植民都市である。1534 年 12 月 6 日、征服者セバスティアン・ベナルカサルによってサンフランシスコ・デ・キトは建設された。植民行政都市であり、1563 年には王立アウディエンシアが置かれる。建設

後まもなくキトはスペイン人の征服・探検活動の拠点として、フランシスコ・デ・オレリャナによるアマゾン探検の出発点となり、またカトリック諸派のミッションによるキリスト教布教の中心地としても重要性を増していく。

キト市内、とりわけ現在の旧市街に当たる区域には、カテドラル（大聖堂）、司教座、カビルド（植民地政庁）、およびそれらに囲まれた中央広場が設置され、数々のカトリック教会や修道院が建設された。教会等の建設開始年をみると、サンフランシスコ修道院はキト建設直後の1534年、サントドミンゴ教会は1581年、ラコンパニア教会は1605年、ラメルセー教会は1700年と、16世紀から17世紀にかけて、今日の主要な宗教施設の建設が始められている。もちろん、それらの建築には完成までに半世紀ないしそれ以上の歳月を要したのだが、いずれも今日のキト旧市街を彩る景観と空間の構成に与っている。

また中央広場から四方にのびる道路は、直角に交差して碁盤目状の格子状街路をつくっている。他のスペイン系植民都市と同じく、王室の都市計画に沿った規則的な都市建設が指向されたのである。現在の旧市街に当たる街区には当初から都市計画が適応され、規則的で画一的な形態と機能がみられた。こうして、いわゆるコロニアル風の都市景観に次のような特徴が生まれた。まず中央広場が設置され、その周囲をカテドラルや政庁、司教座が取り囲み、またそこから四方に石畳の街路が敷かれた。直角に交差する格子状街路によって、区画は碁盤目状に区切られた。また、住宅街は独自の生活世界をつくってきた。富裕層の住宅は、南スペイン風に中庭（パティオ）を囲んだ空間をもち、内向きには開放的ながら、外向きには堅固な壁や窓で防御されていた（中岡1991: 225-249; 山田1987: 35-50）。

植民地当局は市街区を「スペイン人の共和国」と「インディオの共和国」と二分したが、実際には、身分制階層社会である都市のなかに、それら二つの世界が並置する状況だったらしい。スペイン人と先住民の間で混血が進展してメスティソ層が生まれたことも植民地社会の大きな特徴である。植民地時代のキトにはいまだ農村的な要素が色濃かった。市民に食糧を供給する必要性から、市内の大多数の住居には菜園があり家畜の飼育場も備わっていた（Ospina 1992: 108-109）。また後述するように、植民地時代にはキトを舞台として、何度か都市住民による抵抗・反乱の動きが表面化している。他方で、この時代のキトでは文化芸術が隆盛し、なかでも絵画と彫刻に傑出した芸術家たちの集団は「キト派（escuela quiteña）」といわれて注目を浴びていた。

キトにおける独立への動きは1809年と、比較的早かった。独立から国家形成（1830年）に至る歴史において、キトは政治と宗教の中心地として、先進性ととともに保守性

も強めていった。19世紀半ばのガルシアモレノ治世下で、国家とカトリックの一体化が構想されたとき、宗教都市としてキトがその拠点になったのはもちろん、反対に、19世紀末にエロイ・アルファロが自由主義革命で政教分離を進めたのちも、キトは首都でありつづけ、カトリックや地主勢力の凝集性を担う存在であることは変わらなかった。こうしたなかで、諸地域の利害対立が、アンデス高地部（シエラ）と海岸部（コスタ）の地域的な対立として表面化し、それは各々の中心都市であるキト市とグアヤキル市の対立へと収斂していった。むろん両者の関係は拮抗ばかりでなく補完関係も内在させていたが、政治経済面や社会面ではとくに地域対立として先鋭化する傾向が著しかった（Godard 1986; 1987; Kasza 1981; 新木 1994）。

3.2. 都市化と旧市街の成立

キトの都市化は次のような過程をたどった（Achig 1983; Carrión 1987; CEDIG 1984; Gómez 1977などを参照）。1870年代から1920年代にかけて、輸出経済が隆盛をみせるなかで、ラテンアメリカでは都市化に伴う都市の変貌がみられる。そして、キト市でも人口増や区域拡張の一方で、市街地の美化や公共施設の整備などが進められた。やがて、中央広場に隣接する地区に生活してきた上層の者たちが、郊外、とくに環境が良好なキト北部へと住居を移転させることで、市街区の地理的な拡大が生まれた。建築様式にヨーロッパ指向が強まったことも、時代の特徴である。またこの時期には、エクアドルではキトに比べ、港湾都市グアヤキルの方が人口増が著しかった。このためキトは首都でありながら、人口面では首位都市ではなくなり、現在に至っている。とはいえ、20世紀初頭のキトはまだ、小規模な都市であった。2キロと2.8キロ四方の市域で、人口は4万5000人に満たず、家屋数も1600にすぎなかった。

次いで1920年代頃から、本格的な都市化と近代化の波がキトを飲み込み始める。こうして1920年代から1950年代にかけての時期に、市域内に新旧の区分が生まれた。ここに初めて「旧市街」が成立する。新市街がなければ旧市街はなく、この意味で、旧市街は新市街との関係に存立基盤をもつ。他方で、1894年に4万人にすぎなかった都市人口も増加し、1930年には12万人となった。

20世紀半ば、とくに1950年代以降になると都市化が進展し、キト市では市域の拡大や人口増が顕著になる。そして1970年代になると、石油輸出ブームが生まれてエクアドルに近代化をもたらしたが、その波はキトの都市化にも及んだ。国全体でみても、都市人口の比率は28%（1950年）から、36%（1962年）、41%（1974年）、そして50%（1982年）へと、増化する傾向が観察された。またこの時期には、キト市内で

はメスティソや労働者層の比重が高まるなど住民構成の再編がみられ、都市文化的なアイデンティティの覚醒も生まれた (Bustos 1992: 163-188; Goetschel 1992: 319-347; Luna 1992: 191-202)。

その後 1978 年になると、キト旧市街は世界文化遺産に登録される。ユネスコによる指定というこの行為は、都市空間のモニュメント化を促すものであり、それまで以上に、歴史文化の集積地としてキト旧市街への注目が喚起される契機となった。他方で、都市化の進展により都市問題も表面化し、それに対処するための都市計画や都市政策がキトでも実施されてきた。旧市街とそれをめぐる都市計画・政策が、キト市当局の主要な政策事項になったことはいうまでもない (Carrión y Vallejo 1992: 143-169)。

3.3. 旧市街という場

ところで、旧市街とは何か。これまで内容を吟味せずこの言葉を使ってきたが、ここでその内容を考えておこう。新大陸に限らず、また植民地起源都市に限らず、世界の多くの諸都市には、新市街に対しそれと区別する形で、旧市街という都市空間が設定されている。新市街が、都市化に伴う近代化の対象になる空間部分だとすれば、これに対し、より伝統的な市街路や建築物を保持している空間部分をさして旧市街ということが一般的である。前述したように、新市街がなければ旧市街は存在しないわけだ。例えば、ハバナ旧市街 (キューバ) とか、トレド歴史地区 (スペイン) というように、世界の諸都市における該当部分を、日本語では旧市街と名づけたり、歴史地区と呼んでいる。多くの場合、そうした日本語表記は欧米諸語からの訳語であり、厳密な用語とはいえないようである。外国語ではどうか。英語ではオールドシティ (Old City) という表現のように、具体的な都市名の前にオールド (Old) という形容をつける場合が多い。「旧い中心地」=オールドセンター (Old Center) といった表現もみられる。欧米諸都市の場合も、歴史的建造物が集積する地区を「歴史都心 (地区)」とか「歴史地区」(イタリア語で *centro storico*、英語で *historic district*) などと名づけて、保存と風景計画の対象にしているという (西村・町並み研究会 2000)。

スペイン語では同様に、「旧い都市」(*Ciudad vieja*) とか、「歴史都心」(*Centro Histórico*) といった表現が一般的である。前者の例としては「ハバナ旧市街 (*La Habana vieja*)」などがあり、本論で扱う「キト旧市街 (*Centro Histórico de Quito*)」は後者の例に含まれる。なお、文字どおりいえば、*Centro Histórico* という用語は「歴史都心/歴史 (文化) 的中心地」という意味だが、本論ではその日本語訳として、より簡潔明瞭で一般的な「旧市街」という表記の方を用いることにする。

では、この旧市街はどのような都市空間なのであろうか。旧市街が歴史の記憶を刻む空間だとすれば、そこに刻まれる歴史の記憶とは何か。実際に、キト旧市街をめぐるどのような歴史が語られ、いかなる現実状況が観察されるのであろうか。次では、旧市街を中心とする都市空間について、時間と空間をめぐる政治性を考えてみたい。

いうまでもなく都市は、様々な要素（人やモノや情報、文化）が交差しあい、関係しあう場であり、複数の顔をもち、多様な交通の回路をそなえている。歴史研究においてもポリエドル（多面体）としての都市に注目し、都市空間を諸関係が織りなすシステムとして考察する試みがなされている（福井 1985: 9-34）。旧市街もまた社交や商いの場、信仰と修業の場であるとともに、名所や旧跡を内包し、あるいは権力による管理・監視と住民生活や社会的要求とが交錯する政治の舞台ともなる。グローバル化の影響から外的世界の動向との相互作用を加味する必要も出てくる（Carrión 2000: 179-192）。そういう多義的な空間が都市であり都市旧市街なのである。別言すれば、一般に歴史的な建築物や景観は、都市が生み出した芸術作品であり、文化・権力装置でもある。都市共同体にとって、それらはアイデンティティ表現となっている場合が多い。旧市街と観光の関係が注目される機会も増えている（Caraballo Perichi 2000: 106-119）。

キトの場合、旧市街には教会や修道院など植民地時代を彷彿とさせる宗教建造物が集中すると同時に、独立記念碑とか、ポリール像やスクレ像のごとき共和国独立を象徴するモニュメンタルな建造物も点在しており、それらが歴史を想起させる視覚的イメージをかもし出している。迷路のように入り組んだ街路パターン、広場空間などのオープンスペースもまた、都市風景をダイナミックに表現するものである。旧市街の南にはパネシージョの丘が隣接し、そこに立つ女神像とともにアンデス都市の風景を構成している。ここ 20 年ほどの間にキトでも、都市計画の一環として旧市街をめぐる史跡保存や再開発の動きが活発化してきたが、旧市街にある歴史的諸要素が保全と観光の対象になると、町並みと建造物には歴史的文化的な価値が付与され、歴史的遺産（patrimonio）が成立する。植民地時代や共和国の歴史的記憶が回顧され、ノスタルジーすら生まれるのである。

ただ、こうした歴史的空間のすぐ隣には、民衆の生活空間や、露天商の経済空間が連なっていることも忘れてはならない。入り組んだ直交街路は、露天商たちに商業活動の舞台を提供する。大統領府の裏手にある通りを歩くと、路地に沿って数多くの店舗が軒をつらね、物売りの声がこだましている。同時に、それらはインフォーマル性

を際立たせる要素でもある。また貧困や犯罪を連想させる地区として、権力側や外部からの監視と排除のまなざしを免れることはできない。

ここに都市の表象と現存の間における関係が生まれる。歴史的過去への肯定的なまなざしが、現実生きる住民の生活権と抵触するといった事態も起こらざるをえない。住民の生活権および社会経済活動の存立と、これに対する市当局の対応—植民地性を象徴する旧市街を保存し、歴史遺産かつ観光資源にしようとする政策—とが、時に火花を散らす事態も生じている (Collin-Delavaud 2000: 103-121)。象徴性という点では、例えば歴史文化的な遺産として公認されたものが、住民や先住民にすれば、国家権力や植民地権力と分かちがたい負の遺産だとみなされることもあって、両者の関係はさほど単純ではないからである。

そこで次に、都市空間をめぐる先住民と権力の関係にしばって、具体例を検討しよう。

4. 都市空間における権力とエスニシティ

4.1. 都市反乱から先住民運動へ

植民地時代から共和国時代をつうじ、キトでは反権力的な暴動や反乱、運動がたびたび生じた。植民地時代に発生した事件として2つがあげられる。1592年から93年にかけて、アルカバラ（取引税）をめぐる植民地当局に抗する都市反乱が生じた。また、強引な徴税が人びとの離反や反発を招くという事態は、一世紀半後の1765年に、専売所に対する反乱が起きたときにもくり返された。このようにキトは、都市住民や先住民と権力とが火花を散らす舞台となってきたのである。

キトはまた、権力と住民との間で都市政治が展開される舞台でもあった。社会的格差の存在、社会的な関係のなかに埋め込まれている権力構造、そこから生起する支配と被支配の関係性などが都市政治の決定因として働く。植民地遺制としての名望家政治が19世紀末まで継続してきたが、20世紀になると都市政治のあり方に大きな変化が生じた。それは都市に中間層が増加し、彼らが新しい都市型政治、つまりポピュリズム現象（ないし運動）を担う存在になったことである。エクアドルの場合は、1930年代から60年代にかけて隆盛したベラスキスモが、そうした都市政治の一例をなしたといえる。

その後、1979年になって民政移管が実現し、政治的民主化の過程がはじまるが、ここではエクアドル史上はじめて非識字層と先住民層に投票権が拡大され、選挙過程、

そしてより広義の政治過程に、彼らが参入する機会が生まれた。選挙権の付与だけでなく、とくに後者に対して政治アリーナが開かれたことは、市民的諸権利を行使する道が広げられたことと相まって、先住民層の意識化や組織化を促す契機となっていく。1990年代のエクアドルにおいて注目すべき点は、政治の民主化が紆余曲折を経るなかで、先住民運動が活発化し、これを取り込むかたちでより広範な社会運動が展開してきたことである。そして、それらの運動の主要な舞台は首都キトであった。

エクアドルでは1960年代から1970年代にかけていくつかの先住民組織が形成され、1980年代になるとそれらが全国レベルの組織に統合発展する動きが出てきた。そして1986年にはアンデス高地部、アマゾン地域、および海岸部の三つの地域組織、とくに前二者の勢力を結集するかたちで、CONAIE（エクアドル先住民連盟）が結成された。このCONAIEこそが、1990年代において一連の抗議行動（蜂起や行進、建物の占拠など）を主導し、国家＝中央政府との交渉を担う主体に成長していく。もちろん運動にはリーダーとなる知識人の存在が不可欠である。民主化のなかで高等教育の機会や都市生活の経験を得た先住民リーダーたちが、エスニックナショナリズムにかかわる独自の理念と言説を獲得し、地域横断的に民衆層の組織化をはかっていったのである。

全国的な先住民運動の口火を切ったのは、1990年6月の先住民蜂起であった。キト旧市街では先住民によってサントドミンゴ聖堂の占拠や、ハンガーストライキが始められた。また同時に、アンデス高地の各所でも道路封鎖や農園占拠、あるいは軍隊との小競り合いが生じ、交通や物資供給が一時的に麻痺する事態になった。実力行使をつうじて威力を示した先住民組織は、様々な要求をかかげて、中央政府を協議の場に引き出すことに成功した。その際、交渉の舞台となったのはキトである。こうして1990年代のエクアドル政治を特徴づけることになる先住民運動の活発化・政治化の動向は、概括するならば、おおよそ次のような展開をみせた（Araki 2001; 新木 2000b; 2004）。

1990年から始まった中央政府との交渉で、先住民運動側は多民族国家の宣言、土地・農業の問題の解決、先住民層の生活水準の改善など16項目におよぶ要求をかかげていた。1992年にはアマゾン地域の住民がキトへの行進を実施して、入植者や国際石油資本による生活領域侵害の問題を訴えるなどの動きも生まれた。そもそもエクアドルの場合、アマゾン地域と首都やアンデス高地部との距離は近接しており、地域横断的な連携の強化や中央政府への接近を先住民組織が比較的容易に実現できる条件がそろっていた。他方で1990年代前半をつうじ、先住民組織と他の社会運動組織との

連携も進み、その結果、政治体（パチャクティック新国家多民族連合運動、MUPP-NP）をつうじた活動や社会運動調整組織（CMS, Coordinadora de Movimientoas Sociales）と連帯する活動として、先住民運動が展開されていく。先住民組織は当初から多民族国家の宣言をエクアドル政府に要求していたが、1998年8月の制憲議会において憲法改正が実現し、その主張は、多民族多文化国家という規定を憲法条文に盛り込ませることにつながった。

その一方で、1990年代のとくに後半をつうじて、エクアドルの政治経済は困難を抱えつづけ、諸矛盾を堆積させていった。対外累積債務の負担や各政権の政策運営の下手際に、経済自由化とグローバル化の潮流が追い討ちをかけて、社会格差や貧困の増大がみられ、また汚職・腐敗もはびこり、全般的な危機状況を招いた。社会運動によるストライキなどの抗議行動にも拍車がかかった。1997年2月には、ポピュリストの姿勢が強く汚職・腐敗で批判をあびていたアブダラ・ブカラム大統領が、社会各層からの民衆蜂起を機に、就任後わずか半年で国会から罷免され、パナマに亡命している。先住民運動も重要な役割をはたしたこの大統領追放劇は、3年後の2000年蜂起につながる事件といえるもので、都市空間における政治権力と社会運動の関係を示唆する出来事となった。

しかしながら政治経済の困難は激化するばかりだった。とくに1999年になると、民間銀行の相次ぐ倒産と、その救済で節操を欠く政府の姿勢とが、人びとの間に不満を高めるなか、ブラジル通貨危機などの外的要因もわざわいし、通貨スクレの暴落が始まった。政権運営の下手際もあり、当時のマワ大統領に対する反対運動が高まりをみせ、社会経済危機は深刻さを増していった。

こうした苦境を乗り切るための弥縫策として、マワ大統領は2001年1月9日に通貨のドル化を発表した。だがこれが、先住民運動や社会運動による抗議行動にかえって油をそそぎ、国内各層の間に不満や不安をつのらせる結果をもたらした。

4.2. 「キト占拠」をめぐる都市権力関係

2000年1月に発生したエクアドルの「政変」は、マワ政権下の危機的状況に対し、先住民や中堅軍人などの多様な社会層が否をつきつけた事件であった。この事件は「キト占拠」（la toma de Quito）とも呼ばれる（Kingman 2001: 68-77）。この表現は何を意味しているのか。ここでは本論の目的にそくして、次の2点に注目したい。第1に、この事件の主な舞台がキト旧市街であったこと。そして第2に、都市空間における先住民と権力の関係を考えるうえで、格好の素材を提供していることである。事件は

およそ次のような展開をみせた（新木 2000a; 2000b; 2004 詳細については Dieterich 2000; Lucas 2000; Saltos 2000 などを参照）。

2000 年 1 月 9 日にマワ大統領がドル化宣言を発表すると、大統領非難の声は一層高まり、11 日には全国レベルで「民衆議会」が設立され、週末の 15 日（土曜日）から同政権に対する三度目の先住民蜂起が開始された。先住民の集団が各地からキトへと向かい始め、週末から翌週月曜日（17 日）ごろにかけてキト市内には先住民の姿が多数見られるようになった。彼らは、新市街と旧市街の境に位置するエル・エヒード公園を活動拠点として使っていた。従来からキトに住む先住民たちが、キチュア語などの母語で意思疎通をはかりながら、各地からやってきた先住民たちに食糧や住居を提供していたわけで、蜂起や運動の背景では、都市の内外をむすぶ民族的なネットワークが見えない絆として重要な働きをしていたのである。キトの都市空間において南北二つのキトを分かち境として、公園の存在に注目する見方があるが、それによれば、公園＝境界としての公的空間をめぐる力学が、事件の進展にかかわっていたと考えられる（Kingman 2001: 68-77; また Naranjo 1999: 327-335 も参照）。

さて、1 月 20 日（木曜日）になると、先住民たちの集団には、大統領の辞任を要求する社会運動勢力や中堅軍人などが加わり、彼らは国会の占拠に乗り出す。その日、人の波で埋まった国会の議事堂。隣接する最高裁も人びとの波に飲み込まれた。権力の中核では、先住民たちの民族衣装と若手将校たちの軍服とが鮮やかなコントラストをかもし出す様子が、マスメディアによって次々に放映されていった。

植民地権力性を代表する旧市街、そこにだれ込む先住民らの集団。国会の占拠に事態は急展開し、翌 21 日（金曜日）には、民衆の参加者が一段と増加していった。やがて夜に入ると、集団は大統領府に押しかけて、そこを占拠した。こうして、先住民組織と軍と社会運動の三代表（バルガス CONAIE 代表、メンドサ将軍、ソロルサノ元最高裁長官）が参集し、救国評議会の樹立が宣言されることとなる。

救国評議会を構成した三者。1 月 21 日の夜、かれらの声明は、大統領府のバルコニーから、独立広場につめかける群集に向け、またメディアをつうじて全世界に向けて伝えられた。そこはかつてベラスコイバラが「我にバルコニーを与えよ」と宣した場所である。なかでも、今回の事件で象徴的な出来事は、先住民の代表が権力の場に立ったことであり、また先住民と軍人の協力が生まれたことであった。かれらの姿は次のような象徴的イメージを喚起させずにはおかなかった。すなわち、歴史と現在、権力者とサバルタンなどといった植民地性や都市性をめぐる対照的な関係が、一時的にせよ転換しうるというイメージである。

だが事件の顛末はあっけなかった。「軍事クーデター」に対する米国など国際社会の非難を受けて軍上層部が離反したことで、救国評議会はたちまち解散を余儀無くされる。翌22日には、ノボア副大統領が新大統領に昇格就任し、合法的な政権委譲というかたちで、ひとまず事態が収拾された。ノボア政権のもとでは経済自由化は継続され、2000年9月にはドル化も実現されることになる（新木2001）。その間、先住民運動など社会運動勢力は国民投票やストライキを呼びかけながら反政府姿勢をつらぬいてきたが、国民の反応はかんばしいとはいえず、その後は、運動のあり方の模索が続いている。深刻な亀裂を露呈した軍部もまたその役割を問われることになった。

では、2000年1月の事件は何を問いかけているのであろうか。それをたんなる「クーデター未遂事件」と捉えるだけで済まされるのだろうか。エクアドルやラテンアメリカの近現代史における権力とエスニシティの関係を踏まえ、またそれらが相互作用を見せる舞台として都市空間、とくに植民地性を刻む旧市街という空間に注目するならば、そのような単純な政治学的解釈は色褪せてこよう。むしろ、植民地権力性という象徴性に突きつけられた歴史・空間的な意味を、事件から読み取るべきではなかろうか。つまり、キトの時空間をめぐる権力とエスニシティの関係性が、抵抗運動の爆発という大きなうねりをもたらした事件、という意味である。グローバル化の大波にもまれつつあるローカルな場の反乱という言い方もできよう。そうした力学の結節点として、また権力と民族性の関係を再生しうる回路として、都市空間という舞台＝場に注目することもできよう。

キト旧市街という都市空間は、今や、都市内外のネットワークや、グローバルなモノ・ヒト・情報の流れが、幾重にも織りなすスペクタクルな空間になっている。植民地時代から共和国時代をつらぬくラテンアメリカ500年の歴史に照らせば、サバルタンというべき存在（＝先住民族）が都市空間を舞台に植民地権力性（および現存の国家権力自体）をおびやかすまでの威力を示したのであった。この事件は、グローバル化時代における都市のあり方を民族性および権力性との関連で議論するうえで、重要な示唆を与えてくれる出来事だといえよう。

5. おわりに

キト旧市街を対象に、都市性と民族性について論じてきた。以下では、これまでの議論で明らかになった諸点をまとめ、かつ若干の付言を交えながら、都市空間における権力とエスニシティの関係性について考察しておきたい。

建都から今日まで 460 年間余にわたる歴史において、キト旧市街はおよそ次のような変遷をみせてきた。まずスペイン植民地のもとでキトは、キト王立アウディエンシアの首都およびペルー副王領の主要都市として、行政と宗教の中心地となっていた。キト旧市街にはカトリック教会をはじめ多数の植民地建築が建てられ、植民地行政府とその構成員たる白人メスティソ支配層にとって、そこは居住空間であり執務空間であった。

その後、独立から国家形成をへて共和国時代の 170 年間余をつうじ、キトおよびキト旧市街の機能と位置には次のような変化が観察された。共和国の首都となったキトには 20 世紀初頭から今日まで、市街地の南北方向への拡大と人口増を中心とする都市化が顕著であった。その過程で、かつて支配層の居住地であった旧市街は、中下層民の居住地へと性格を変化させた。むろん依然として、三権機関などが旧市街には点在していたが、そこにある植民地建築や宗教施設は、植民地権力（行政と宗教）の面影をノスタルジックに漂わせながら、むしろ歴史文化的な価値を表象するようになった。他の植民都市の場合と同様に、こうしてキト旧市街は「セントロ・イストリコ (Centro Histórico、歴史文化的中心地)」という象徴空間になったのである。別の角度からいえば、現在のキト旧市街は、権力の中心という植民地時代からの継続性を保持しつつ、同時に、植民地性（および現国家の正統性）を歴史文化的な価値に還元しつつ、政治文化的な時空間を形成している。

他方で、キトの都市化に伴う社会民族性の変化も顕著であり、それを受けたキト旧市街では、民衆の諸活動（居住、商売、社会運動など）と政治権力（中央政府、キト市当局など）との様々な関係（対立、交渉など）が表面化してきた。旧市街の街路は、行商人たちのインフォーマルな商業活動の場となり、とくに民政移管（1979 年）後は、都市住民による住民運動の高揚を迎える。多様な民衆の活動と、それに附随するインフォーマル性やマージナル性とは、旧市街を特徴づけるようになったのである（Naranjo 2000: 155-163）。これに対し、都市権力（とくにキト市当局）側は、歴史的遺産の再評価と経済活動の活性化を目的に、キト旧市街の再活性化の計画を立案かつ実施しようと努めてきた。こうして、住民の生活権および社会経済活動の存立と市当局の政策とが、利害をめぐる社会的交渉、さらには紛争を伴う社会空間関係へと発展してきたのである。こうした状況と関連して重要な現象は、キト旧市街という都市空間において、権力に対する民族性の主張、とりわけ先住民族のエスニシティの主張が台頭してきたことである。都市に先住民が常住するだけでなく、先住民運動の激化のなかで、旧市街の社会民族関係に急激かつ多大な変容がもたらされた。

その象徴的な事件が、2000年1月に発生した「キト占拠」であった。植民地権力性を代表する旧市街と、そこになだれ込む先住民らの集団。われわれはこの事件から、植民地権力という象徴性に突きつけられた歴史・空間的な事件—キト市の時空間をめぐる権力とエスニシティの関係における変動—という意味合いを読み取るべきことを本論で強調した。ラテンアメリカの歴史に照らせば、サバルタンというべき存在が都市空間を舞台に植民地権力性をおびやかすまでの力を示したのであり、グローバル化時代における都市のあり方を考える示唆がそこから得られるであろう。

植民地起源都市へのアプローチは多様であろうが、本論で採用した視角（権力とエスニシティの関係）も、都市の比較研究に資するアプローチのひとつにちがいない。ただ以上の検討では、キト史であれ旧市街の比較分析（Carrión ed. 2000を参照）であれ、ほとんど取り上げられなかった側面が多々残っている。本論を出発点として考察を深めていくことは今後の課題としたい。

参考文献

- Achig, Lucas.
1983 *El proceso urbano de Quito*. Quito: CIUDAD.
- Aguilar, Paúl et. al.
1992 *Enfoques y estudios históricos: Quito a través de la historia*. Quito: Municipio de Quito / Junta de Andalucía.
- Altamirano, Teófilo.
2000 “Patrimonio cultural, multiculturalidad y mercado cultural en centros históricos”, en Fernando Carrión (ed.) *Desarrollo cultural y gestión en centros históricos*. Quito: FLACSO-Ecuador.
- Araki, Hidekazu
2002 “Movimiento indígena y estado plurinacional: el caso ecuatoriano” en Yamada Mutsuo y Carlos Iván Degregori (orgs.) *Estados nacionales, etnicidad y demperacia en América Latina*. JCAS Symposium Series 15, Osaka: JCAS-NME.
- Bustos, Guillermo.
1992 “Quito en la transición: actores colectivos e identidades culturales urbanas (1920-1950)”, en Paúl Aguilar et. al. *Enfoques y estudios históricos: Quito a través de la historia*. Quito: Municipio de Quito / Junta de Andalucía.
- Caraballo Perichi, Ciro.
2000 “Centros históricos y turismo en América Latina. una polémica de fin de siglo” en Fernando Carrión (ed.) *Desarrollo cultural y gestión en centros históricos*. Quito: FLACSO-Ecuador.
- Carrión, Fernando.
1987 *Quito: crisis y política urbana*. Quito: El Conejo / CIUDAD.
- Carrión, Fernando.
2000 “Centro histórico: relación social, globalización y mitos”, en Fernando Carrión (ed.) *Desarrollo cultural y gestión en centros históricos*. Quito: FLACSO-Ecuador.
- Carrión, Fernando. (ed.)

- 2000 *Desarrollo cultural y gestión en centros históricos*. Quito: FLACSO-Ecuador.
- Carrión, Fernando y Rene Vallejo.
- 1992 “La planificación de Quito: del Plan Director a la ciudad democrática”, en Fernando Carrión (coordi.) *Ciudades y políticas urbanas en América Latina*. Quito: CODEL.
- CEDIG
- 1984 *Quito: aspectos geográficos de su dinamismo*. Quito: CEDIG.
- Collin-Delavaud, Anne.
- 2000 “Una negociación social en el corazón del Centro Histórico de Quito: comerciantes de la calle y Municipalidad”, en Julie Massal y Marcelo Bonilla (eds.) *Los movimientos sociales en las democracias andinas*. Quito: FLACSO-Ecuador / IFEA.
- Dieterich, Heinz.
- 2000 *La cuarta vía al poder: el 21 de enero desde una perspectiva latinoamericana*. Quito: Abya-Yala.
- Godard, Henri.
- 1986 “Análisis comparado de los centros y de los lugares de centralidad en Quito y Guayaquil”, *Cultura* [Revista del Banco Central del Ecuador] Vol. VIII, Núm. 24c.
- Godard, Henri.
- 1987 “Quito-Guayaquil: eje central o bicefalía”, en Serge Allou et. al. *El espacio urbano en el Ecuador: red urbana, región y crecimiento*. Quito: CEDIG.
- Goetschel, Ana María.
- 1992 “Hegemonía y sociedad (Quito: 1930-1950)”, en Eduardo Kingman (compil.) *Ciudades de los Andes: visión histórica y contemporánea*. Quito: CIUDAD.
- Gómez, Nelson.
- 1977 *El área metropolitana de Quito*. Quito: CEDIG.
- Kasza, Gregory.
- 1981 “Regional Conflict in Ecuador: Quito and Guayaquil”, *Inter-American Economic Affairs*. Vol. 35, No. 2.
- Kingman, Eduardo.
- 2001 “La ciudad como reinención: el levantamiento indígena de enero de 2000 y la toma de Quito”, en *ICONOS* [Revista de FLACSO-Ecuador] Núm. 10, Abril.
- Lozano Castro, Alfredo.
- 1991 *Quito, ciudad milenaria: forma y símbolo*. Quito: Abya-Yala / CIUDAD.
- Lucas, Kintto.
- 2000 *La rebelión de los indios*. Quito: Abya-Yala.
- Luna, Milton.
- 1992 “Los mestizos, los artesanos y los vientos de la modernización en el Quito de inicios de siglo”, en Paúl Aguilar et. al. *Enfoques y estudios históricos: Quito a través de la historia*. Quito: Municipio de Quito / Junta de Andalucía.
- Naranjo, Marcelo.
- 1999 “Segregación espacial y espacio simbólico: un estudio de caso en Quito”, en Ton Salman y Eduardo Kingman (eds.) *Antigua modernidad y memoria del presente: culturas urbanas e identidad*. Quito: FLACSO-Ecuador.
- Naranjo, Marcelo.
- 2000 “Etnicidad e informalidad”, en Fernando Carrión (ed.) *Desarrollo cultural y gestión en centros históricos*. Quito: FLACSO-Ecuador.
- Ospina, Pablo.
- 1992 “Quito en la colonia: abastecimiento urbano y relaciones de poder local”, en Paúl Aguilar et. al. *Enfoques y estudios históricos: Quito a través de la historia*. Quito: Municipalidad de Quito / Junta de Andalucía.

Salto, Napoleón (compil.)

2000 *La rebelión del arcoiris: testimonios y análisis*. Quito: Fundación José Peralta.

Salvador Lara, Jorge.

1992 *Quito*. Madrid: Editorial MAPFRE.

Thacker, Marjorie.

2000 “Aproximaciones a las diferencias culturales en los centros históricos”, en Fernando Carrión (ed.) *Desarrollo cultural y gestión en centros históricos*. Quito: FLACSO-Ecuador.

新木秀和

1994 「エクアドルの国家形成と地域問題—19世紀におけるグアヤキル地域主義の台頭」『史境』第29号、歴史人類学会。

2000a. 「先住民と軍人の共闘?—エクアドル1月政変の背景と波紋」『ラテンアメリカ・レポート』17-1、アジア経済研究所。

2000b. 「噴出するエクアドルの先住民運動—90年蜂起から1月政変へ」『ラテンアメリカ・カリブ研究』第7号、つくばラテンアメリカ・カリブ研究会。

2001 「ドル化と通貨の生態学」『イペロアメリカ研究』第XXII巻第2号、上智大学イペロアメリカ研究所。

2003 「エクアドル—政治変動とネオリベラル経済改革」『ラテンアメリカ・レポート』20-2、アジア経済研究所

2004 「先住民の抵抗、先住民運動の展開」松下洋・乗浩子編『全面改訂版 ラテンアメリカ 政治と社会』新評論。

福井憲彦

1985 「近代生成史から都市空間の解剖へ」二宮宏之ほか編『都市空間の解剖』新評論。

中岡義介

1991 「新大陸に刻まれた記憶—都市空間の基底と発展」国本伊代・乗浩子編『ラテンアメリカ 都市と社会』新評論。

西村幸夫・町並み研究会編

2000 『都市の風景計画—欧米の景観コントロール 手法と実際』学芸出版社。

奥田道大編

1995 『21世紀の都市社会学2 コミュニティとエスニシティ』勁草書房。

1997 『都市エスニシティの社会学—民族／文化／共生の意味を問う』ミネルヴァ書房。

大澤善信

1996 「都市空間における国家と権力」吉原直樹編『21世紀の都市社会学5 都市空間の構想力』勁草書房。

山田睦男

1987 「スペイン系アメリカ植民地都市の規則的形態確立過程の背景と要因」『史境』第14号、歴史人類学会。